



Title	デカルトにおける感覚の欺きと「第六答弁」第九項 : 感覚の第三段階を中心に
Author(s)	宮崎, 隆
Citation	カルテシアーナ. 1991, 11, p. 45-60
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66941
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

デカルトにおける感覚の欺きと「第六答弁」第九項

——感覚の第三段階を中心に——

宮 崎 隆

問題と考察の順序

デカルトは「第三省察」において、「熱さ」「冷たさ」という感覚的観念を例に取り「材料的虚偽 falsitas materialis」(VII, p. 43)⁽¹⁾を指摘する。ピエールマンとの対話によれば、「われわれはそれ〔＝感覚的観念〕の本性そのものにおうて誤ることがありうる」(V, p. 152)。また、「第六省察」においてデカルトは、「自然の真の誤謬 verus error naturae」(VII, p. 85)を認め、「痛み」の感覚や水腫病患者における「渴き」の感覚をその例に挙げる(VII, pp. 85-89)。

しかるに、「第六答弁」第九項においてデカルトは、感覚をいわば「第三段階」に分けて説明しつつ、一方でその第一・第二段階には「何らの虚偽 falsitas も在りえなう」(VII, p. 438)と語る。誤謬が見いだされるのはもっぱらその第三段階においてである。それゆえ、「材料的虚偽」にせよ、「自然の真の誤謬」にせよ、こうした感覚の欺きは感覚の第三段階において生じる。ところがデカルトは、他方で、「熱さ」「冷たさ」「痛み」「渴き」などを、感覚の第二段

階に属せしめてもいる。したがって、「熱さ」「冷たさ」にせよ、「痛み」や「渴き」にせよ、感覚の欺きが生じるのは、こうした感覚にとって必然的なではなくて、むしろ第三段階の感覚に対してこそ特徴的な事態だろう。この点で、第三段階に位置する感覚は或る特定の性格を備えた特定の在り方をしていよう。では、感覚は、どのような仕方（第三段階にもたらされ、そこにおいてどのような性格を担っているのか。小論では、この問題を中心に扱う。そのため、われわれはまず、「第六答弁」第九項の記述を概観する。次いで、材料的虚偽の概念規定を試みることに）によって、欺きの指摘される感覚の性格を確認する。そして最後に、感覚が、第三段階にもたらされてそのような性格を備えるに到る仕方について、若干の考察を試みたい。

一 感覚の三段階

「第六答弁」第九項（VII, p. 436-439）において、「感覚における三段階」についてデカルトはおよそこう語っている。第一は「われわれと動物とに共通である脳の運動」の段階である。第二段階には、第一段階から「精神のうちに直接的に反響 immediate resulare してくるものすべて」が属す。その例として、デカルトは「痛み、擦りの快 *gaudio*、飢え、渴き、色、音、味、香り、熱さ、冷たさ、およびこれに類するものの覚知 *perceptio*」を挙げ、さらにこう指摘する。「もし正確に感覚を知性から区別したいとわれわれが望むなら、〔この第二段階に属す感覚の〕他のなものも感覚へと関係づけられるべきではない」。したがって、上で例示された第二段階に属す諸感覚こそが、本来の感覚と呼ばれるべきだろう。『屈折光学』の言葉を借りるなら、唯一「本来的に *proprement*」（VI, p. 130）感覚に属す感覚対象は、第二段階に位置する。これに対して、第三の段階はむしろ「知性のみ *solus intellectus* に依存する」段

階、ペイサードも指摘しているように純粋知性の段階である。⁽³⁾

ところで、デカルトは「身体器官の運動を機会 *occasion* にわれわれの外の事物について幼少の頃からわれわれの為すのが習慣になっている判断」、虚偽の見いだされる習慣的・日常的判断をも、感覚の第三段階に数え入れている。たとえば、「私が感触されている色の感覚から、私の外に在る棒が色をもつと私は判断」し、「色の延長や限界、および脳の諸部分との位置関係から、当の棒の大きさ、形そして距離について推論」するのだから、「日常人によって感覚に帰せしめられているとはいえ」、この第三段階が「独り知性のみに依存することは明らか」だと語る。こうして、本来の感覚とは言いがたい (cf. VI, p. 130) 「大きさ、形、距離」ばかりか、本来の感覚に関する習慣的・日常的判断も第三段階に組み入れられる。

しかるにいっそう正確にいえば、本来の感覚は、いわば判断それ自身に先立って、判断対象に成るために第三段階にもたらされている、とわれわれは解釈することができる。その理由はこうだ。「われわれが判断する……もの *ea quae... judicamus* をわれわれは知性に帰する」とデカルトは述べ、判断対象が知性の段階に属していることを主張している。つまり、感覚の第三段階が知性に依存するのは、なによりも、判断対象の知性によって認識されているがゆえだと解される。⁽⁴⁾したがって、たとえば、「私の外に在る棒が色をもつ」と私が「判断」する際、判断対象となっている限りでの棒の「色」は、すでに感覚の第三段階に属しているだろう。しかしながら、「色」は第二段階に属す本来の感覚のうちに数え入れられてもいた。しかも、脳の運動から精神のうちに「直接的」に反響してくるのは第二段階の感覚である。かくして、「身体器官の運動」を、すなわち、感覚の第一段階を「機会」に習慣的・日常的判断が為されるにせよ、それが本来の感覚についての「判断」である限り、第二段階に存する本来の感覚が第三段階へともたらされることを介し

てはじめて成立するだろう。

こう言い換えてもよい。第二段階に属す限り、感覚には「何らの虚偽も在りえない」のであった。それゆえ第二段階には、形相的虚偽 *falsitas formalis* ばかりか、材料的虚偽も在りえない。ところで、材料的虚偽の指摘される感覚は「誤謬の材料 *materia erroris*」を「判断」に提供する。したがって、第二段階に存している感覚は第三段階へともたらされてはじめて、材料的虚偽の指摘される感覚と成る。こうして、判断に誤謬の材料が提供される。さらに、この誤った材料に基づいて判断するなら、われわれは形相的虚偽を犯すことになる。習慣的・日常的判断には、このような仕方て犯された虚偽が見いだされるだろう。われわれはそれゆえ、材料的虚偽の検討に移ろう。

二 材料的虚偽

「第三省察」によれば、「熱さ」や「冷たさ」などの感覚、すなわち感覚的性質の観念は、材料的虚偽の生じうるほど、それほど「少ししか明晰でも判明でもない」(VII, p. 43)。感覚的性質の観念は曖昧かつ混雑であるがゆえに、材料的虚偽の可能性が認められる。観念のうちに材料的虚偽が見いだされるのは、感覚的観念の曖昧性 *obscuritas* のゆえに、当の観念が「誤謬の機会」ないし「誤謬の材料」を「判断」に提供する場合である (VII, p. 232, p. 233, et pp. 234・235)。そして、材料的虚偽は形相的虚偽と区別される (VII, p. 43)。形相的虚偽の方は「判断のうちにしか見いだされない」のに対して、材料的虚偽は「観念のうちに存在する」(*ibid.*)。しかるに「第四答弁」によれば、材料的虚偽の指摘される観念は、形相的 *formaliter* に解された観念でも質料的 *materialiter* に解された観念でもない。「第四反論」の著者アルノーは「形相的に解された観念を考察することによって、その観念のうちにはいかなる虚偽もないと主

張している」(VII, p. 231) にすぎない、とデカルトは答弁する。ここで言われている「形相的に解された観念」とは、「何物か aliquid を表象する限りにおいて考察された」(VII, p. 232) 観念のことであるから、今の場合「形相的に解された観念」は、その定義上、「第三省察」において説明されている「対象的 objective に」解された観念 (cf. VII, pp. 40-43)⁴ あるいは『哲学原理』(以下『原理』と略記)などに言う「表象的 representative に」解された観念 (cf. VIII-1, p. 11) とほぼ同義である。また、「知性の作用である限りにおいてのみ観られる」なら、観念は「質料的に解されている」わけだが、「その場合、いかなる仕方でも、対象の真偽は顧慮されないことになる」(VII, p. 232)。かくして、いずれに解された観念のうちにも材料的虚偽は見いだされない。

ところで、デカルトによれば、「熱さ」や「冷たさ」の観念など、「曖昧かつ混雑な観念においては、……実際にその観念であるところのものは別の何かへと関係づけられるということがしばしば生じる」(VII, p. 233)。逆に、観念が「単独のものとしてそれ自身において観られ、その観念を何か他のものに私が関係づけなければ、観念は元来偽ではありえない」(VII, p. 37)。つまり、「観念それ自身を、私の思惟の或る様態として考察するに止め、何か他のものへと私が関係づけなければ、観念が私に誤謬の材料を与えることはほとんど *vix* ありえない」(*ibid.*)。『ほとんど』⁵と言われている以上、観念を何か他のものへと私が関係づけなくても材料的虚偽はありうる。したがって、材料的虚偽の本質はこの関係づけに存しているわけではない。しかし逆に、観念を単独に考察するなら、つまり、観念をもつばら「思惟の或る様態」とみなすなら材料的虚偽は生じないだろう。

実際、感覚的観念をもつばら「思惟の或る様態」としてのみ考察する限り、感覚的観念は曖昧・混雑ではなくて、反対に、明晰・判明だとわれわれは考えることができる。「思惟の様態」たる感覚的観念それ自身はなるほど、純粋知性

によって捉えられるいわゆる明証知ではないだろう。したがって、感覚的観念は「思惟の様態」であっても、かならずしも純粹知性の様態であるわけではないだろう。その場合、感覚的観念はなるほど純粹知性の様態ではなくて、感覚の様態であるだろう。しかし、『原理』によれば、感覚的観念が「もっぱら感覚としてのみ、すなわち、思惟としてのみ観られるなら、明晰判明に覚知される」(VIII-1, p. 33)。感覚的観念は、単独で感覚としてのみ観られる場合、明晰・判明である。ところで、観念が曖昧でなければ、判断に「誤謬の材料」が提供されることもない。この場合、それゆえ感覚的観念から材料的虚偽が生じることはない。したがって、材料的虚偽が、「思惟の様態」たる感覚的観念それ自身だけから帰結するわけではない。曖昧性・混雑性は「思惟の様態」たる感覚的観念それ自身とは別のところから由来している。

上に挙げた『原理』の同じ節に従うなら、たとえば、「色や痛み sensation が、あたかも色のある物体のうちに、あるいはあたかも痛んでいる「身体」の」部分のうちに実在することくに表象しているものが、いったい何であるのか」は理解されない (*ibid.*)。感覚的観念が何を表象しているかは不明である。つまり、感覚的観念を、感覚の様態たる「思惟の様態」とみなす限り明晰・判明であるが、感覚的観念が何かを表象している限りで、曖昧・混雑となる (*cf. ibid., et VIII-1, p. 35*)。そしてこの曖昧性から材料的虚偽が生じると考えられる。

しかるに、形相的に解された観念に対しては材料的虚偽が指摘されていなかった。そして、形相的に解された観念とは、或る事物を、すなわち「何物か *aliquid* を表象する限りにおいて考察された」観念のことであった。では、形相的に解された観念と曖昧・混雑な感覚的観念とはいったいどこが異なるのか。「第三省察」においてデカルトは、観念が虚偽である場合を、「すなわち、観念がいかなる事物 *res* をも表象していない」(VII, p. 44) 場合と言い換えている。

が、これは曖昧・混雑な感覚的観念が形相的に解された観念ではないことを意味している。材料的虚偽の指摘される感覚的観念は、事物である限りでの或る事物を表象しているわけではない。しかしだからといって、曖昧・混雑な感覚的観念が何も表象していないわけではない。色や痛みの感覚が何かを表象していることは否定されていなかった。実際デカルトは「第三省察」において、材料的虚偽を指摘するに先立って、観念を「対象的な在り方」に相応する(VII, p. 26)と規定している。したがって、材料的虚偽の存する感覚的観念が対象的に解された観念であることをデカルトは否定しているわけではない。これに対して、「思惟の様態」である限りでの感覚的観念こそが、「思惟の外に在るもの一切を nihil 表象していない」(VIII-1, p. 35)と考えられる。

かくしてわれわれの解釈はこうなる。一方で、形相的に解された観念は対象的に解された観念とほぼ同義ではあるが、しかし完全に等しいわけではない。つまり、ゲルーも指摘しているように、今問題になっている感覚的観念から表象的性格が排除されたわけではなく、そうではなくて、この感覚的観念からは事物 res に対する指示関係が剝脱されたにすぎない。ゲルーによれば、「材料的虚偽」の見いだされる「曖昧かつ混雑な観念——感覚」、こうした感覚的観念は「本来の意味での観念対象 idea をもたない」が、だからといってその「表象的性格」を拒否すべきではない⁽⁶⁾。つまり、材料的虚偽の見いだされる感覚的観念、曖昧・混雑な感覚的観念もやはり、対象的にあるいは表象的に解された観念であることに変わりはない。それはやはり、「事物の像 imago rei (イマゴレイ)」(VII, p. 37) 観念、性質である限りでの感覚的性質の観念である。材料的虚偽の指摘される感覚的観念は、表象的性格を備えている限りにおいて、形相的に解された観念と同じ身分をもつ。ただし、形相的に解された観念と取り違えない限り、表象的性格を担っている感覚的観念が指示しているのは「何物か」たる或る事物ではなく、そうではなくて「非事物 non res」にすぎない。感覚的観念は、

それが「非事物」を表象するにすぎない点で形相的に解された観念とは異なる。実際、「第三省察」によれば、「材料的虚偽は観念のうちに在る」と言われるのは、「観念が非事物を事物の」とく表象する *non rem tanquam rem repraesentare* 場合」(VII, p. 43) である。かくして、感覚的観念が、対象的に解された観念として、事物ではない何かを表象している限りで、感覚的観念における曖昧性・混雑性が生まれる。こうして、判断に誤謬の材料が提供される。

ところで、「第一答弁」によれば、観念が「対象的に」在るとは、「対象が知性のうちに通常存在する仕方」で「在ること」と規定される。したがって、材料的虚偽の指摘される感覚的観念も、やはり「知性の対象 *objectus eius*」[*intellectus*] (VII, p. 102) である。しかるに、感覚の第三段階は知性の段階であった。かくして、材料的虚偽の見いだされる感覚的観念が、表象的性格を担いつつ、感覚の第三段階に位置していることが、確認された。

三 自然の真の誤謬と材料的虚偽

「自然の真の誤謬」を生み出す感覚についても、われわれは同様に考えることができる。

水腫病患者の「渇き」の感覚については、デカルト自身がわれわれの考えを支持してくれる。一方で、デカルトは水腫病患者における「自然の真の誤謬」を認めていた。他方で、すでに参照した「第四答弁」において、材料的虚偽を問題にしつつデカルトは、反論者アルノーに対してこう語りかけている。「たとえば、水腫病患者における渇きの観念が、当人にとって飲み物は害となるはずなのに、それは自分にとって有益であると判断する機会を与えるという場合、その観念は実際に当人に誤謬の材料を提供してはいないだろうか」(VII, p. 234) と。したがって、「自然の真の誤謬」は材料的虚偽の見いだされる観念から生じるだろう。

実際、「自然の真の誤謬」を例証するために「第六省察」において主に用いられる「痛み」の感覚にも、われわれは表象的性格を読み取ることができる。「第六省察」においてデカルトは、自然学の知識を援用しつつ (cf. VII, p. 87)、「痛み」の感覚を例に取ってこう説明する。足以外に存する何らかの原因が、足から脳にかけての神経において、あるいは脳自身において、「足が傷を受けた場合にかきたてられるのが常であるのと同じ運動をかきたてるなら、痛みはあたかも足において感じられ、感覚は自然的に欺かれる」、がしかし、「脳における同じ運動」が「[身体の]他の部分のあるよりむしろ、足の痛みをいつでも精神に表示 exhibere することは理にかなっている」(VII, pp. 88-89)。このように説明される「痛み」の感覚の欺きは、身体部位に関わっている。脳の運動は、痛みが「あたかも足において *tantum in pede*」感じられように、足の痛みを「表示」する。ところで、材料的虚偽を問題にしつつわれわれは、「あたかも痛んでいる[身体の]部分のうちに実在する」とくに *tantum in parte dolente existens* 表象しているものが、いったい何であるか」は理解されえないという『原理』の記述を参照し、「痛み」の感覚に表象的性格を認めた。この場合、表象的性格を担っている曖昧・混雑な「痛み」の感覚は、その内容上、身体部位の指定をすでに含んでいる。したがって、「自然の真の誤謬」をもたらし「痛み」の感覚も、材料的虚偽の指摘される感覚的観念に等しい、と解釈される。^(?)かくして、「自然の真の誤謬」にせよ、「材料的虚偽」にせよ、感覚の欺きは、表象的性格を担っている観念に関して成立する。こうした感覚的観念は、感覚の第三段階において、「対象的な在り方」をしている。

四 感覚の欺きと注意作用

今、自然の誤謬を生み出す「痛み」の感覚にわれわれは表象的性格を読み取った。この場合、足において感じられる

「痛み」の感覚は「脳における同じ運動」から生じる。しかるに、「第六答弁」第九項によれば、「脳の運動」から精神のうちに「直接的に」反響してくるのは第二段階の感覚であった。これに対して、感覚の欺きが生じるのは感覚の第三段階においてであった。したがって、第二段階における感覚が、それ自体で表象的性格を備えているのではなく、そうではなくて、この感覚が第三段階へとたらされることによって表象的性格を担うに到る、と考えられる。では、第二段階に属す感覚は、どのような仕方で表象的性格をもつに到るのか。感覚の第一段階から第三段階へと到る流れの一部なりとも展開して理解すべく、われわれは最後に、この問題を少し考えてみたい。

そのためにまず、『掲貼文書への覚え書』（以下『覚え書』と略記）に従って、感覚的観念が本有観念として表象的性格をもつことを確認しておこう。『覚え書』によれば、「われわれの思维に現前しているものとしてわれわれの持っているしかしかの「感覚的」観念が、われわれの外に在るなにがしかの事物に関係づけられるとわれわれが判断する」のは、「そうした事物が、感覚器官を介してそれら「感覚的観念」自身をわれわれの精神に送り込んだからではなく、そうではなくて、しかしかの時に、それ「精神」に本有的な能力によって、それら「感覚的観念」を作り出すための機会 *occasio ad ipsas [ideas] ... efformandas* をそれ「精神」に与える何物かを送り込んだからである」(VIII-2, pp. 358-359)。小論冒頭で指摘した「第六答弁」第九項の言葉を思い出すなら、第一段階の感覚を「機会」に習慣的・日常的「判断」が為されるのも、第一段階の感覚が精神に対して感覚的観念を「作り出す」ための「機会」を与えるがゆえである。ただし、『覚え書』の続く記述によれば、精神が感覚的観念を「作り出す」といっても、たとえば作為観念を生み出すことを意味しているわけではない。すなわち、「痛み、色、音等々の観念は、何らかの物的運動を機会 *occasio* にわれわれの精神が当の観念をおのれに表示 *exhibere* [仏訳では「表象 *représenter*」] しようためには、本

有的でなくてはならない。なぜなら、「これらの感覚的観念は」物体と何らの類似ももたないからである」(VIII-2, pp. 358・359)。つまり、感覚的観念を「作り出す」とは、「表示〔表象〕」することを意味する。こうして、「類似」の有無が議論の俎上に乗らうような「事物の像のごとき」感覚的観念が、すなわち、表象的性格を備えた感覚的観念がわれわれに与えられる。このとき、本有的な感覚的観念は表象的性格を担っている。⁽⁸⁾

われわれは、そこで、本有観念の一つである神の観念が表象的性格をもつに到る仕方を参考に、考察を今一歩進めよう。

「第三答弁」によれば、観念が本有的であるという場合デカルトが理解しているのは、「その観念がわれわれにとって常に眼前に現われている」ということではなくて、「もっぱらわれわれがその観念を誘い出す *elicere* 能力をわれわれ自身のうちに持つ」(VII, p. 189) ということである。すなわち、本有観念は精神の「眼前」にいつでも現われているわけではなく、或る時は「伏在的 *implicitus*」(cf. III, p. 430) な在り方をしているだろう。たとえば、幼児の精神は、「注意」を欠いた大人と同様、神についての「伏在的」な観念を持っている (à X(Hyperaspistes), août 1641, III, p. 424) と解される。逆に、『ジョルマンとの対話』によれば、「伏在的」な神の観念は、「注意」の働きによって「顕在的 *explicite*」に成る (V, p. 153)。したがって、本有観念を「誘い出す」作用は、「注意」の働きによる当の観念の顕在化と考えられる。しかるに、ほぼ同じことを、デカルトはこう表現している。「神の観念は、神を認識する能力をおのれのうちに持たない者はいない、という具合に人間精神のうちに刻印されているが、しかしこのことは、この〔神の〕観念を自らに判明に表象 *représenter* することなく一生を過ごす人も多い、ということを妨げはしない」(à Clesselier, 17 février 1645, IV, pp. 187・188)。したがって、神の観念は、「注意」の働きによって顕在化され、

このような仕方で精神の「眼前」にもたらされて、判明な表象と成っている。

では、神と同じく本有的と規定された感覚的観念に関しても、神の観念の場合と同じ仕方では表象的性格をもつに到ると言いうるのだろうか。たとえばラポルトは「注意」作用に着目しつつ、明晰・判明とも曖昧・混雑とも規定される心身結合に関わる原始概念 *notion primitive* について、およそ以下のような解釈を行なっている。

ラポルトによれば、心身結合に関わる概念は、「われわれの知覚内容」としては曖昧・混雑であるが、「それ〔心身結合に関わる概念〕へとわれわれの注意が赴く時、われわれに隠されたままでありうるものをそれらにも含んでいない」ゆえに、この概念は判明である。つまり、その時、心身結合に関する概念は「混雑性についての判明な観念」となる。⁽⁹⁾ このラポルトの解釈をアルキエに倣って言い換えれば、「注意」を働かせることによりわれわれは、純粹知性によって「混雑性を明晰に認識することができる」⁽¹⁰⁾。

なるほど、残念ながら事態はいわば反対のように思われる。ラポルトのこの解釈を惹起しているテキストのひとつ、一六四三年六月二十八日付のエリザベト宛書簡によれば、「いっそう少ない注意を要求する思惟よりむしろ省察すること」が、われわれの持っている両者〔「精神と身体」の結合に関する概念のうちに曖昧性を見いださしめた〕(III, p. 693) のであり、「魂と身体との結合に関する事柄は、知性のみによっても、想像力に助けられた知性によっても、曖昧にしか認識されないものであって、感覚によってきわめて明晰に認識される」(III, pp. 691・692)。純粹知性に与えられる明晰・判明な観念、たとえば神の観念とは反対に、「注意」がむしろ心身結合に関する概念を「曖昧」にする。しかしそれゆえ、われわれは以下のように解釈することができる。

右で引用したエリザベト宛書簡およびそれに先立つ書簡では、三種の原始概念が問題になっており、そのうちの一種

が、心身結合に関わる概念である。そして、デカルトは原始概念を「単純概念 *notion simple*」と言い換え、「われわれの魂はそれら〔単純概念〕すべてを魂の本性上おのれのうちにもっており」、したがって「われわれは単純概念をわれわれの魂のうち以外に求めることはできない」(21 mai 1643, III, p. 666)と語る。ところで「第三省察」によれば、私は本有観念を、「私の本性それ自身以外から得ているわけではないと思われる」。それゆえ、今の場合、本有的である感覚的観念は「原始概念」を意味する。

さて、一方で、この書簡によれば、「われわれの誤謬の主要な原因は、それらの〔原始概念のうちの或る一つの種類の〕概念を用いて、その概念に関わらない事柄を説明しようと、概して欲することに存する」(ibid.)。逆に言えば、誤謬を避けるには、「物・身体のみに関わる概念や魂のみに関わる概念なしに、魂と身体との結合に関わる概念を思い抱く」ことが肝要である(ibid.)。というのも、「原始概念」たる感覚的観念は、たとえば魂のみに関わる原始概念を明晰・判明に認識する純粹知性によってではなく、そうではなくて「感覚によってきわめて明晰に認識される」からである。心身結合に関する概念は純粹知性によっては曖昧にしか認識されない。他方で、小論冒頭でみたように、感覚の第二段階に位置する限り、本来の感覚には「何らの虚偽もありえない」。さらにすでに指摘したように、感覚的観念は、単独で感覚としてのみ観られる限り、明晰・判明である。つまり、「第六答弁」第九項の言葉を用いて表現すれば、「もし正確に感覚を知性から区別したいとわれわれが望むなら、『この第二段階に属す感覚の』他のなにもものも感覚へと関係づけられるべき」ではなく、もし感覚が、知性の段階たる第三段階へともたらされずに、もっぱら第二段階に位置するのなら、そのとき、感覚は、明晰・判明に覚知され、一切の欺きを免れている⁽¹⁾。そして、感覚の第三段階へともたらされてしまうなら、そのとき、感覚は曖昧・混雑である。感覚の第二段階に在っては明晰・判明な本来の感覚も、第三段

階においては曖昧・混雑であり、ここにおいて感覚の欺きが生まれる。

ところで、神の観念は、「注意」の働きによって精神の「眼前」にもたらされ、判明な表象となっている、とわれわれは理解した。これに対して感覚的観念の場合、「注意」の働きが感覚的観念を曖昧・混雑にするのであった。しかるに、一方で、曖昧・混雑な感覚的観念は、「対象的な在り方」をしており、感覚の第三段階に位置して、表象的性格を担っている。そこには「材料的虚偽」が見いだされる。他方で反対に、神の観念は、「対象的な在り方」をしているとき、明晰・判明であり、そこには「材料的虚偽」は見いだされない。神の観念は「それ自身によって *per se* : 真なる観念 *vera idea*」(VII, p. 46)¹ すなわち、材料的に「真なる観念」である。したがって、明晰・判明な神の観念と曖昧・混雑な感覚的観念はともに表象的な性格を備えている。

われわれの解釈はかくしてこうなる。「注意」作用が働いているとき、神の観念も感覚的観念も、ともに、「対象的に」解された観念として表象的な性格を担っている。この点で、神の観念と同様、感覚的観念も「注意」の働きによって表象的性格をもつに到る。もう少し正確にいうなら、神の観念と同様、「注意」を働かせることによりわれわれは、感覚的観念を純粹知性によって表象として認識する。ただし、感覚的観念は、知性によって表象として認識されるとき、曖昧・混雑に成っている。つまり、第一段階の感覚から「直接的」に反響してくる第二段階の感覚は、「注意」作用によって知性の段階たる感覚の第三段階へともたらされ、こうして感覚の欺きが生じる。

註

- (1) デカルトからの引用参照は、A T版の巻数と頁数とを本文括弧内に記す。なお、引用文中の「」内は筆者による。
- (2) 第二段階の感覚はいかなる性格を担っており、いかなる仕方で第一段階の感覚から反響 *resound* してくるのか、この興味

深い問題に関しても、機会を改めて論じたい。

- (3) J.-M. Beysade, "L'analyse de morceau du cercle. Contribution à l'étude des 'degrés du sens' dans la Seconde Médiation de Descartes" dans *Simlichkeit und Verstand*, hrsg. von H. Wagner, 1976, pp. 19-20.
- (4) ベイサードは、第九項で語られている「判断」と感覚の第三段階との関係を「知性が判断する」という言葉を用いて解釈しているが、蜜蠟の例をラテン語で読むようにというベイサード自身の指摘をここにも適用するならばテキスト上において、また、「第四省察」をくぐってきたことを思えばデカルトの主張の上においても、この言葉には無理があると思われる。cf. J.-M. Beysade, *ibid.*, et p. 10.
- (5) Cf. V, p. 152, et Descartes, *Œuvres philosophiques*, Tome II, Ed. de F. Alquié, Garnier, 1967, p. 434. (以下、この三巻本をFAと略記)。
- (6) M. Gueroult, *Descartes selon l'ordre des raisons*, I, *l'âme et Dieu*, Aubier, 1968, pp. 216-217.
- (7) たとえば「第三省察」において材料的虚偽を指摘するに先立って、あるいは『屈折光学』において「デカルトは音、味、光、色などをまとめ、延長、位置、大きさなどと区別して論じている (cf. VII, p. 43, VI, pp. 130-141)」。この区別は、感覚の第二段階と第三段階との区別に対応する。したがって、「位置」も感覚の第三段階に属すと解される。この点で、身体部位、すなわち身体上の「位置」をその内容上含んでいる観念は、すでに第三段階へともたらされてしまっている、と推測できる。
- (8) 感覚的観念が本有的であると言われるのは、感覚的観念とそれに対応する物・身体との「類似」の否定によってである。つまり、その内容に関する限り、感覚的観念は本有的である。したがって、もし内容とは別の側面に注目するならば、かならずしも感覚的観念の外來性が否定されたことにはならぬ。
- (9) J. Laporte, *Le rationalisme de Descartes*, P. U. F., 1988 (1950), pp. 250-251.
- (10) FA, III, 1973, p. 44.
- (11) 「第六答弁」第九項においてデカルトは、第二段階の感覚が心身結合から「生起することは、『第六省察』において述べられた」(VII, p. 437)と記しており、「第六省察」では同じ表現を用いて「或る混雑した思惟することの様態」(VII, p. 81)を指摘している。この指摘に従えば、第二段階に属す感覚は混雑した感覚とも解釈されうる。しかしながら、今度は、「第三省察」によれば、混雑した感覚様態には材料的虚偽が見いだされる。われわれはそれゆえ、「第六省察」のこの指摘において

第一段階の感覚から帰結する際の「直接」性に触れられていない点を顧慮しつつ、むしろ、この指摘に続いて展開される以下の記述に注目したい。すなわち、感覚の覚知は、「本来的に *proprie*」その役目を果たしている限り「十分に明晰かつ判明」であるが、しかし、「あたかも追求あるいる忌避すべきであるが、ごく自然によって表示 *exhibere* されるものそれ自身」に関して「新たな困難 *nova difficultas*」が起こる。われわれはそして、これが「自然の真の誤謬」に関わる「困難」だと解することができる。

(横浜国立大学教育学部講師)